ラグビー中毒

第17回

松瀬 学

申年生まれのベテランが吠える 村田亙「今年はオレの年」

ヤマハ発動機

心配、御無用。ワタルは元気だった。

昨年、ワールドカップ（W杯）の代表メンバーから外れはしたが、ラグビーへの情熱は変わらない。在籍するヤマハ発動機のグラウンド（静岡県磐田市）。骨の髄まで凍りそうな日でも、元日本代表SHは黙々とパスを投げ、タックル、走り続けていた。

なおも光を放つ。小さな背中には覇気と誇りとちょっぴり哀愁が漂っている。

新春。今月36歳、申年生まれの好漢は笑うのだ。「申年は俺だ、復活のトシだ。新たなムラタワタルを見せたい。まだ俺はできる。今でも日本でナンバーワンだぞそって」。

グラウンド横の体育館でのインタビューだった。いつも通りの律儀な対応。両手を膝に載せ、背筋を伸ばす。ファンから愛されるはずである。で、古い話だけれど、やっぱり、話題はW杯へ。4大会連続出場の夢は成らなかった。

「もちろんショックだった」

社会人のトップリーグでは序盤、不本意なプレーが続いた。体調を崩し、怪我もあった。苛立ちが募った。

「ぽっかりとアナが空いた感じだった。なんか体が重いし、きついし。正直、自分のプレーができていなかった」

そんな時である。友人であるサッカーのゴン中山（雅史）が自宅にきた。激励してくれた。「プレーしている以上、やっぱりジャパンを目指すでしょ、って。熱いヤツです。うれしかった」。

W杯中断の再開後、調子が上向いてきた。動きにキレが戻った。そして、闘争心に火がついた。「これ、笑われるかもしれないけど」と、エピソードを打ち明ける。

12月7日のサントリー戦。実はその前日、テレビ中継の解説者がジャパンの向井昭吾監督と会った。

「ほんと、ふっと燃えるものがあった。まだ、できるというのを見せないといけないかんと」

サントリー戦のプレーは凄かった。結果は快勝、これで上昇気流に乗った。

古巣の東芝府中戦ではラスト3分で2トライを挙げ、12点差を追いついた。体を張る勢が加わった今期、目標は最低でもベスト4である。

「トップリーグ元年に〝ミラクル優勝〟したいんです」

楕円球とともに走り続けて、もう30年にもなる。小学校1年の福岡市の草ヶ江ヤングラガーズから、東福岡高―専大―東芝府中―フランス・バイヨンヌ、そしてヤマハ。

実は私は彼の兄とは幼馴染で、三つ、四つの頃から知っている。泣きながら向かってくる、負けん気は凄かった。

「挑戦」がキーワードである。フランスに渡り、『プロ第1号』にもなった。

「ラグビーの最先端にいて、流れを変えてきたのかな。家族がいたから、チャレンジができたんです」

ラグビーをしていなかったら、デザイナーを目指していた。初夢にはどんな絵を？

「サルがいっぱい、キース・ヘリングのサル版です。ラグビーボールを持って走っているのが俺です。楽しそうに」

2004年。

「俺のトシ。サイコーの年になる予定です」

引退の二文字も忍び寄ってくるのだろうが、ま、新年だから無粋なことはいいではないか。最後に、ただひたむきにラグビーと家族を愛するトシ男に年賀状を。

『ワタルさん、あなたはとても輝いています』――。

ベテランとして「つなぐ」ことも意識する（左）